



映画化された「雪国」（モノクロ、1957年公開）のDVDジャケット。主演は池部良さんと岸恵子さん。小説に描かれた雪の風景も見どころ

The Nobel Prize in Literature 1968
Yasunari Kawabata

ノーベル賞事務局のホームページで紹介されている川端康成さんの経歴。9行目に「『雪国』が日本を代表する作家にした」と記されています

Share this:

12

Yasunari Kawabata - Biographical



Yasunari Kawabata, son of a highly-cultivated physician, was born in 1899 in Osaka. After the early death of his parents he was raised in the country by his maternal grandfather and attended the Japanese public school. From 1920 to 1924, Kawabata studied at the Tokyo Imperial University, where he received his degree. He was one of the founders of the publication *Bungei Jidai*, the medium of a new movement in modern Japanese literature. Kawabata made his debut as a writer with the short story, *Izu dancer*, published in 1927. After several distinguished works, the novel *Snow Country* in 1937 secured Kawabata's position as one of the leading authors in Japan. In 1949, the publication of the serials *Thousand Cranes* and *The Sound of the Mountain* was commenced. He became a

「雪国」に描かれた 川端康成さんの白の美意識

色のない白は最も清らか
であるとともに、最も多
くの色を持っています。

（ノーベル文学賞の受賞講演から）

ノーベル文学賞を受賞した川端康成さん（1889～1972）がスウェーデンのストックホルムでの授賞式の講演で、白には最も多くの色が含まれていると言ったことをシリーズ3号で書きました。「美しい日本の私」というタイトルのこの講演は、日本人の伝統的な美意識を世界に表明したもので、佐良志奈神社の社標和歌「月のみか露霜しぐれ雪までにさつしさらせるさつしなな里」の美意識とつながっているので紹介しました。

「色のない白は最も清らかであるとともに、最も多くの色を持っています」というのが川端さんの言葉ですが、この言葉は花瓶に挿した一輪の花の美しさを説明する文章の中にあるもので、その花として選ばれたのは白ツバキです。水をふくんだ白ツバキの花弁の美しさも強調しています。「美しい日本の私」は自然の美しさをうたう和歌を中心に紹介しており、白色のことについて全面的に語っているわけではありません。しかし、月を詠んだ和歌を複数取り上げており、結果的に白のイメージを濃く感じます。

なぜ、川端さんはこの講演で白色が最多色であることを指摘する一文を入れたのか気になっていて、代表作の「雪国」にヒントがないかと思い、読み関連の資料を調べました。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」というあの有名な書き出しに白のイメージを強く感じたからです。読んでみて驚きました。白が作るイメージの中でも、特に「清浄」「浄化」のイメージを効果的に使っているのです。

「雪国」は妻子ある東京のインテリの男と豪雪地帯である新潟県の温泉街の若い芸者との愛と情念が描かれています。現代風にいえば、男の浮気不倫、都会の男にほれた田舎の女の純愛と憎悪、男女のかけひきもあります。しかし、髄所に雪の白色でそれらを浄化する表現が登場するのです。例えば男が自分が惚れられていると気分をよくしながらも、芸者が奏でる三味線の音を聴きながら自分を冷めた目で見る場面の川端さんの描写です。

「こんな日は音がちがう」と、雪の晴天を見上げて、駒子（注・芸者の名前）が言っただけのことではあった。空気がちがうのである。劇場の壁もなければ、聴衆もなければ、都会の塵埃もなければ、音はただ純粹な冬の朝の澄み通って、遠くの雪の山々まで真直ぐに響いて行った。

また男と芸者の関係が、一つの言葉でだいたしなくなるうとした場面の後に続く川端さんの次の描写です。

紅葉の錆色が日ごとに暗くなっていった遠い山は、初雪であざやかに生きかえった。薄く雪をつけた杉林は、その杉の一つ一つがくつきりと目立って、鋭く天を指しながら地の雪に立った。

惚れあった男と女の間では、愛憎、嫉妬などさまざまな感情が行き交います。川端さんはそんなたくさんの色模様を包み込めるのが白だと思っていたのではないのでしょうか。「雪国」はノーベル賞事務局でも川端さんの代表作とされていました。川端さんはそれを知っていたからこそ、白が日本人の美意識であることを講演で伝えようとしたのではないのでしょうか。